

近世城下町の祭礼

～江戸天下祭と麻賀多明神祭礼を素材に～

2024年11月14日開催

千葉県文書館から講師を招き、江戸の天下祭と言われた神田祭・山王祭と下総佐倉の秋祭りの3事例を通して、江戸と地方の城下町における祭礼の違いを学びました。



神田明神 江戸城下町の祭礼①

江戸城下町の総鎮守。城下町建設の初期から江戸の主だった祭礼であった。祭礼は、神輿（神事）、出シ・附祭（町方が主体）の二つで構成されており、御雇祭も行列に加わった。神田祭と山王祭のみ江戸城内の巡行を許され、将軍の上覧にあずかった。江戸の天下祭として幕府に公認された祭礼で、財政的援助もあった。



山王権現 江戸城下町の祭礼②

江戸城の鎮守。幕府と将軍家から最も重要視されていた。祭礼の構成は神田祭と同様。附祭で行われる練物のうち、有名なものに麴町の象がある。1729年、ベトナムから象が将軍家に献上され、江戸町人のあいだで流行したことからモチーフとして好まれた。神田祭同様、幕府公認の祭礼であったため財政的な援助があった。

地方城下町の祭礼 麻賀多明神

元は城下の鎗木村の鎮守であったが、歴代藩主が麻賀多明神を佐倉の総鎮守として篤く崇敬した。祭礼は、神輿渡御（神事）、藩主名代の行列（藩が主体）、ねり祭（町方が主体）の三つで構成されている。城内巡行は行われず、祭礼執行の中心は町人。費用も町人への負担が大きく、町方主体の祭礼ともいえる。

